JAPANESE A2 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Monday 19 May 2003 (morning)
Lundi 19 mai 2003 (matin)
Lunes 19 de mayo de 2003 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A soit la section B. Écrire un commentaire comparatif.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.

問題Ａか問題Ｂのどちらかを選び、答えなさい。

問題Ａ

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。

テキスト１（ａ）

仏像は静止している。伽藍は静止している。もちろん境内の風景は静止している。と、だれしも思うだろう。仏像や建築や山や木というものは、写真の対象のうちでは、スタティックな被写体に属するはずである。わたしも長い間そう思っていた。ところがある日、宇治の平等院へ撮影に行った帰り、鳳凰堂に別れを告げようとして振り返ってみたら、茜雲を背にたそがれている鳳凰堂は、静止しているどころか、目くるめく早さで走っているのに気がついた。しばし呆然としたわたしは、思わず「カメラ！」とどなった。すっかり帰るつもりでいた助手たちは、げっそりした顔でカメラの組み立てにかかった。その間にも鳳凰堂は逃げるように、どんどん、どんどん走っている。「早く、早く。」とわたしはジダンダ踏んだ。そして棟飾りの鳳凰にピントを合わせるのももどかしく、無我夢中で一枚シャッターを切った。たった一枚。そしてもう一枚と思って、レリーズを握ったわたしは、シャッターを切るのをやめた。さっきまで金色にかがやいていた茜雲は、どす黒い紫色になり、鳳凰堂そのものも闇の中にすがたを消していたからである。それは全くどこかへ逃げ去ったとでもいうほかない早さで、すがたを消していた。

フランスの写真家カルティエ＝ブレッソンは、シャッター・チャンスについて決定的瞬間ということを主張するが、決定的もへちまもありゃしない。シャッターを切れる瞬間は、たった一度しかないのであった。それにしても、茜雲の平等院以後、わたしには、仏像も建築も風景も、疾風のような早さで走るものになってしまったのには閉口である。

（土門　拳『土門拳写真展“古寺巡礼”図録』、「走る仏像」）

（注）土門拳（1909-1990 ）写真家。

スタティック……静的な。じっとした。

鳳凰堂……京都府宇治市の平等院阿弥陀堂。

レリーズ……シャッターを遠隔操作する。

カルティエ＝ブレッソン（Cartier-Bresson 、1908- ）……フランスの高名な写真家。

テキスト１（ｂ）

荒木夫妻が、写真を見ながら語り合っている。最初は、高層建築に囲まれた、とある公園の風景を、次に新宿柳町の一角を撮った写真を眺めているところである。

夫：公園てのは面白いんだよ。……三脚を据えたときに、待ち撮りはしない。これはたまたま子供たちがここにいたの。人がいないと恐いっていうか、もっと写真っぽくなるだろう。もう十分もすると人がいなくなるからシュールになると思っても、そうはしない。三脚を立てたときに、せっかちに撮る。その時間にそこに行ったんだから、その時間のことを撮る。

（中略）

夫：これは新宿の柳町ですよ。灯籠があったり、ゴミ箱が二つ重なってたり……。

妻：これも行き止まりでしょう。

夫：行き止まりっていいねぇ。お地蔵様が坐っていたり、パアーっとイヌがクソしてたり、ネコが坐っていたり、色々なのに出会うでしょう。これが最後の写真だけど、今までずうーっと眺めていて、行きづまりを求めてというか、行き止まりにいきたい、そういうのが俺にはあるね。だから行き止まりまで道をボンボン行く。この写真でも、塀があるから、そこから向うをのぞいて、何かあったら飛び越えて、俺は行くね。この向うだとたいてい駐車場とか、広場とか、そういう類のものだけど。

妻：そんなことしてて不審に思われない？。

夫：そりゃ、不思議に思われるよ。三脚かかえて、汚れてるところばかり撮るじゃない。このディテール美しいと言ったって通じないもん。「そんなとこなんで撮るの」って、怒鳴られるわけ。向こうだって玄関を撮られるのならいいけど、ホコリのかかった風呂場とか洗濯機の上とか、棚の上にのっかっているハイターを裏から撮られてみろよ。それはイヤだよ。でも、そういうところに人間の魅力とか、街の魅力とかがあるんだよ。

（荒木　経惟、荒木　陽子『東京は、秋』、築摩書房）

（注）荒木経惟（1940- ）写真家。荒木陽子（1947-1990 ）荒木経惟の妻。
シュール……シュール・レアリズムの略。転じて、非日常的な奇抜なさま。
ハイター……漂白剤の名前。

問題 B

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。

テキスト２（ａ）

ミミ公はいよいよ年をとり孤独の味を加えて来た。私たちのいる側に必ず置物のようにじっと蹲っているのだが、それも遠慮がちにじゃまにならぬ隅の方に位置がきまっている。「隅の隠居」の綽名はそれから生れた。

「きょうは隅の隠居はどうしました？」

5 と、友人が尋ねてくれるくらいに家の中で異色のある存在となった。

注意して見ると、「隅の隠居」は耳が木くらげのような形に縮んでいるだけではなく、他の猫と違い、あまり人に媚びない。超然として目をあいているし、超然として居睡りをしている。際立った特徴は、食物をねだって啼くことがないことである。私が台所へ入って暮らすようになってから気がついたのは、五匹いる猫の四匹が一つ皿

10で食事するのに隅の隠居だけは他の猫から離れて、ひとりだけ別の皿で食事することである。世話する妻が不精をして、一つ食器しか出さないと他の猫は争うようにして貪り食うのに「隅の隠居」はちらと目をくれるだけで、空腹の場合も黙って立ち去るのであった。贅沢な奴だなと私は云った。

しかし、見ていると、その卑屈でない態度が気持よかった。「隅の隠居」には「隅

15の隠居」らしい気概があって、心に染まぬことは決して譲歩したり妥協しないのである。年を取って体力も弱り、歩くのにもよろよろしていたが、他の若い猫が御隠居の皿に突込もうものなら、隠居は猛然として、礼儀を忘れた相手をおどしつけ、首に爪をかけて捻じ伏せるのだった。老いぼれているが、気力は他の猫を最後まで圧倒していた。

20 風邪でもひいたのか、二三日、めっきり弱りが見えていたと思ったら、昨夜は便をするにも私に戸をあけさせて、悠々と外へ出て行ったが、今朝になって見ると炬燵の隅に置いた果物の空籠の中で冷たくなっていた。

猫としても立派な奴だったと思う。小さい時から不幸で惨めな一生だったのに、卑屈でなかったのが気持がいい。庭の白い梅の木の根もとに穴を掘って葬ってやった。

（大仏　次郎『隅の隠居』）

（注）隠居……俗世を離れて、山野に隠れ住むこと。

テキスト２（ｂ）

ミーのもっぱらの親友は、筋向いの本屋の猫で、二匹は週刊誌を並べた台の上でふざけるのが好きである。本屋の猫は靴屋のミーと同じ模様だが、お腹が真白なところが、少し本屋らしくインテリくさいし、わがまま坊っちゃん風だ。本のうしろへ、っと隠れてミーを待つ。ミーはその手にはのらず、あべこべ側の本棚の上から背後を襲い、俄然大さわぎになると、奥の方から「なんじゃい、お前ら、外へ行かんかい、アホンダラ」と主人の大声が聞こえる。

二匹は、ヘン！　というような顔をして近所の草っぱらへ、もつれあってとびだしてゆく。ミーの木のぼりは定評がある。といっても誰もミーなどに関心があるわけではないが、私は一目見て、そのダイナミックな身のこなしと、枝から枝への跳躍の技術にも舌をまいた。本屋の猫も負けじとかけのぼっては、落ちそうになり、枝にしがみついたりしてるが、さすがに男の子だけあって“ボクは駄目なんだ”などと弱音ははかずに、松の木の上のミーを追う。男同士のゲームだった。

私は朝、靴屋の前を通りがけに木型の下にミーがいないと、「どこへ行った？」とおばさんに尋ねる。

「さあ、どっかそこらへんの原っぱで遊んでまへんか」

と、忙しそうにポポーンと釘をうち、猫やら、その友達なんかの相手などしておれんという顔をする。猫の友達とは私のことだ。

私は空地の草むらの前で大声で猫を呼ぶ。

すると、草むらのすすきの穂がざわめいて、傾いだと思うと、ジャンプしてきたミーの四脚がぴたりと大地におさまり、真直ぐ私をみつめる。

私には草むらはジャングルに思われ、猫のミーは豹のようにみえてくる。

たしかに靴屋の猫には居間的な匂いはみじんもなく、いつも野の香りが充ちていた。私が動物から欲しいのはこの自然の息吹きだった。（中略）

豹のつもりでベタベタと背中をたたくと、ミーは急に目を細め、野獣から人間世界へもどった表情で、素直に身をまかせ、私の脚をそのしなやかな体でぐるりとまきつけて、友情を示したかと思うと、じゃあね、ボクはちょっと忙しいから、と言って、また草むらの中へ身をおどらせた。

（鴨居　羊子『靴屋のミー』）

（注）鴨居羊子（1925- ）下着デザイナー。